

色彩研修がもたらす地域活性化の可能性 ～地域活性化ツールとしての色彩研修の実践研究 その2～

外崎 由香^{*1}

1. はじめに

我が国の地域活性化や少子高齢化は大きな課題であり、中でも北海道における少子高齢化のスピードは加速している。人口減少や少子高齢化は、地域コミュニティの衰退や、これまでの集落機能の維持が困難な状況を招いている。北海道の場合は札幌への一極集中が顕著に表れており、地方の活力が衰退しているところも多い¹。

地域の活動促進のために北海道総合政策部「平成27年度施策概要」²では「住民ニーズや、地域課題が複雑化していく中で、活気にあふれ持続可能な地域づくりを進めていくためには、行政のみならず、市民やNPO、企業など地域の多様な主体がその担い手となってお互いに協力し合い、地域が目指す方向に向かって取り組んでいくことが必要になってくる。」と述べている。これまでの行政依存ではなく、地域住民が地域活動の主体となることは、縦割り行政の手法から、多種多様な横のつながりや連携を生むことが想定され、これまでにないフレキシブルな発想と対応が期待される。

また、北海道総合政策部「2025年北海道のすがた」³によると、「人口減少の要因は少子化にあり、最近の合計特殊出生率は1.20まで低下している。低下の背景について結婚に対する意識の変化や子育てコストの増加などがある。」と、人口減少の背景を上げている。少子化と共に労働力人口の低下にもふれており、「新たな人材の活用として、高齢者や女性の活用が労働力確保していくために必要である。」と述べている。人口減少は労働力の低下と関係性があり、高齢者と女性の労働力活用が必要としている。高齢者と女性は労働力であると同時に、地域を支える重要な人材である。

高齢者の場合、地域への居住年数が長く、すでにコミュニティが完成している場合も多いことから、高齢者の健康寿命を如何にして伸ばし、地域で活躍してもらえるかが重要になってくる。女性の場合、ライフイベントによって働き方も、地域活動の関わり方も変わってくることから、画一的な手法では解決しないと想定される。幅広い女性のライフイベントに応じられる手法が必要であると考えられる。

このような背景から筆者はこれまで、高齢者や女性、幅広い世代に応用が利き、かつ、手軽に取り入れられる「色彩」をテーマに研究を重ねてきた。色彩の効果や機能を活用した研修内容やツールの開発を手掛け、地域活性化に役立たせる可能性を探求するために実践研究を行ってきた。

前稿⁴では新ひだか町社会福祉協議会主催の「ボランティアコーディネーター研修」、み

^{*1} 藤女子大学人間生活学部非常勤講師。藤女子大学QOL研究所客員研究員。

んなで、ひと、まちづくり委員会（千歳教育委員会）主催の講演会「私（シニア）のオシャレを見つけよう～あの輝きをもう一度～」、津別町社会福祉協議会、津別町地域包括支援センター合同主催の「ボランティアコーディネーター研修」の3団体において、色彩を取り入れた研修とアンケート調査、ヒアリングを実施した。調査結果からわかったことは、色彩をテーマに講演会や研修を実施した3団体共に参加者の増加がみられたことである。特に社会福祉協議会主催の研修は、参加者が固定されている背景があり、地域活動やボランティア活動などの新たな人材発掘に苦勞していた。色彩は幅広い年代に興味関心を持ってもらえるテーマであり、これまでとは異なる参加者もあり、地域において新たな人材の発掘に繋がることがわかった。

本稿では実践研修の数を増やし、色彩研修が地域活性化事例を検討する。事例対象として、名寄市社会福祉協議会主催の「平成27年度第4回市民ボランティア講座」で引き続き研修を実施し、アンケート調査の考察を行う。

2. 背景と研究方法

2-1. 色彩を用いたコミュニケーション

色彩をテーマに取り上げた理由は、色彩は普遍的で身近なアイテムであることから、幅広い応用が可能である。日常のファッションやインテリア、メイクなどの色合わせを気にする人も多いだろう。子どもは大人から色彩について教わる前から、色彩を通じて気持ちを表現する。描いた絵から心理を読み取るアートセラピーの研究は国内外で活発に行われている。ビジネスではロゴマークやホームページ、パンフレット、プロダクト、商品陳列など非言語コミュニケーションツールとして「カラー戦略」が重要視されている。すべての人が快適で心地良い生活を送るためのユニバーサルデザインに色彩情報も欠かせない。

このように活用方法の幅広い色彩をテーマに扱うことで、老若男女、国内外を問わずに発展的に研究を継続することが可能であると考え。研究テーマの中心に「色彩」という軸を置き、多角的な視点と実践研究を重ねることで、最終的には具体的な色彩ツールを活用した地域活性化や手法、QOL向上を目的とする。

また地域づくりの主役は、その地域の住民であることが望ましい。これまで地域活動者の高齢化が著しい昨今では、新たな人材発掘が急務の課題である。これまで地域活動を継続してきた高齢者だけでなく、新たな人材を交流させるための“きっかけづくり”や“コミュニケーションツール”が必要であると考え。女性を新たな人材発掘とする場合も、前述したとおりに、女性のライフイベントに合わせる必要性と、興味関心を持ってもらえる内容や仕組みづくりを考慮しなければならない。

本研究を継続しシステム化またはツール化し扱いやすく提案することで、地域住民が模倣または応用し、地域活動に役立ててもらえれば幸いである。

2-2. 色彩を応用したカードゲームの開発

前稿でも考察を行った色彩を応用したカードゲームをこの度、商品化して実践研究を行

った。色彩を通して参加者が笑顔になり、コミュニケーションが向上し、QOL 向上に繋がるサプリメントのような存在を望んで「スマイル^{カラー}色サプリ」とした。(登録商標 5 7 9 3 1 0 3 号)。カードゲームの内容はトランプの神経衰弱を応用した色合わせゲームである(図1)。和の伝統色名 21 色の組み合わせを神経衰弱ゲームで記憶しながら遊ぶ内容である。トランプ遊びは子どもの頃に誰もが経験があり、ルールも簡単で取り入れやすいことや、3～6人のグループで行うことでコミュニケーションの向上も見込める。

さらに前稿と同様にカードゲームを実施する前後に簡単な計算ドリルを実施し、カードゲームの前後でどのような変化が生じるのかも調査した。一般的なトランプの神経衰弱は集中力や記憶力向上に用いられるが、色彩のカードゲームでも何らかの学習力の向上が確認できれば、更なる集客向上にも役立ち、参加者の体験学習意識も向上することが予想され付加価値が出てくる。

実施した内容は次の通りである。①簡単な計算ドリルを1分間行う。②グループワークでカードゲームを行う。③再度、簡単な計算ドリルを1分間行う。1回目の計算ドリルの回答数と2回目の回答数に変化が現れるのか調査を行う。第1回目の計算ドリルと第2回目の計算ドリル(図2)の難易度は同程度になるように作成した。



図1. 色彩のカードゲーム

色でイキイキ 脳トレーニング			色でイキイキ 脳トレーニング		
問題	答え	問題	答え	問題	答え
2+16=		13+8=		1+19=	
1+26=		5+14=		9+15=	
2+14=		17+7=		7+11=	
15+16=		14+4=		13+13=	
12+6=		6+19=		26+15=	
25+17=		12+4=		12+5=	
1+16=		18+4=		11+1=	
8+15=		13+14=		17+0=	
22+9=		19+4=		19+9=	
3+17=		13+6=		16+12=	
4+11=		19+18=		8+19=	
6+15=		12+6=		16+7=	
12+13=		15+24=		28+5=	
14+8=		0+14=		16+4=	
15+16=		9+14=		11+2=	
6+26=		10+9=		9+26=	
7+19=		18+14=		17+13=	
19+14=		10+13=		14+1=	
15+22=		17+2=		9+10=	
19+1=		5+14=		8+18=	

色でイキイキ 脳トレーニング			色でイキイキ 脳トレーニング		
問題	答え	問題	答え	問題	答え
22+6=		13+9=		1+14=	
1+25=		3+14=		9+19=	
2+18=		14+6=		7+12=	
15+14=		15+4=		14+14=	
12+7=		6+15=		26+13=	
15+12=		2+24=		12+6=	
1+18=		18+6=		13+1=	
7+15=		15+12=		27+0=	
22+5=		19+3=		18+8=	
13+7=		11+6=		17+11=	
4+13=		18+17=		7+19=	
7+15=		13+6=		16+5=	
12+16=		13+24=		28+7=	
14+9=		0+18=		15+0=	
15+14=		9+15=		11+5=	
7+27=		3+19=		9+24=	
7+18=		18+14=		18+14=	
19+13=		10+12=		14+2=	
15+28=		17+1=		8+12=	
18+1=		6+13=		8+17=	

図2. 左：第1回目の計算ドリル、右：第2回目の計算ドリル

3. 研究事例

3-1. 「平成27年度第4回市民ボランティア講座」

名寄市社会福祉協議会主催のボランティア講座で色彩を取り入れた研修を実施した。研修内容は、色彩の効果や日常に活用する手法、先述した色彩のカードゲーム「スマイル色サプリ®」を使用した色彩体験学習を行った。筆者による説明の後、1グループ5～6名に分れて色合わせカードゲームを実施した。グループ分けをする際に、初対面同士が1つのグループになるように設定してもらい、コミュニケーション向上につながるのか検証をおこなった。図3は研修時の体験学習の様子である。図3のように初対面同士でも楽しく参加している様子が窺える。研修後にアンケートを実施し、その場で回収した。アンケート項目、その他詳細は以下の通りである。

1) 日 時 2016年1月30日 13:30～15:00

2) 会 場 名寄市総合福祉センター（名寄市西1条南12丁目）

3) 演 題 色で心と暮らしを元気に！～彩り豊かな心を育む色彩講座～

3) 参加者 名寄市民などが対象、男女40名（聴覚障害者2名の参加も含む）

アンケート回答者は32名

4) アンケート項目

アンケート項目は次の通りである。①～⑦は選択肢に○を記入、⑧は自由記入とした。

①性別（男性・女性）

②年齢（20代・30代・40代・50代・60代・70代・80代・90代）

③居住年数

（1年未満・1～5年未満・5～10年未満・10～20年未満・20年以上）

④これからも現在の居住地に住み続けたいですか？

（住み続けたい・できれば住み続けたい・どちらでもない・転居したい・転居する）

⑤居住地のコミュニティについて

（はい・どちらでもない・いいえの選択肢を用意）

・地域の行事に参加しやすいですか？

・地域の情報は十分に得られていますか？

・地域の交流、世代の交流は充分ですか？

・地域の交流は必要だと思いますか？

⑥今回の事業に参加した感想をお聞かせください（複数回答可）

（楽しかった・知り合いが増えた・また参加したい・知人にも伝えたい・自分で企画したい）

⑦今回のような事業は、地域の交流に役立つと思いますか？

（役立つと思う・どちらとも言えない・役立たない・他の方法が良い）

⑧内容で面白かったこと、驚いたこと、学んだことについてご意見をお聞かせください。



図3. 研修時の体験学習の様子（グループワークによる色のカードゲーム）

3-2. 色のカードゲームの結果

参加者の属性を表1に示す。男性10名、女性22名、合計32名、平均年齢は51歳である。名寄市社会福祉協議会へのヒアリングによると、これまでよりも20～40代の女性の参加が多く見られた。前稿同様に色彩をテーマにした研修は幅広い興味関心を引くと考えられる。本研修の参加がすぐに地域活動者の人材確保にはつながらないが、きっかけ作りとして可能性を感じることができる。

表2に属性とカードゲーム前後に実施した計算ドリルの回答数を示す。図4には回答数の増減をまとめ、視覚的に分かりやすいように円グラフにまとめた。

計算ドリルの回答数の増減をみると、全体の81%が1回目より2回目の回答数が増加し、平均増加回答数は5問であった。

参加者数の内、2回目の回答数が減少したのは3名のみでいずれも-1であった。1回目と2回目の回答数に変化が無いのは3名であった。計算ドリルの回答数が1回目よりも2回目は大幅に増加していることがわかった。

前稿の実践研究と比較検討してみると、同様の結果であることが窺える（表3）。津別町の参加人数は31名で平均年齢は59歳、名寄市の参加人数は32名、平均年齢は51歳であり、同じような属性であることから、比較検討にも適している。

色のカードゲームの前後に行った計算ドリルの結果を見ると、いずれの解答増加数は5問で同じ結果となった。さらに、減少点数はいずれも-1点で、人数も1名しか差が出なかった。回答数に変化が無いのはいずれも3名で、前回と今回の実践研究結果はほぼ同じ結果であることがわかった。

このことから色合わせカードゲームによって何らかの計算力の向上、集中力向上などに繋がる効果が更に期待できるといえるだろう。第2章でアンケートの考察を行うが、研修の感想で集中力や記憶力、脳が活性化されたと体感するコメントも寄せられている。前稿も本稿も計算ドリルによる検証を行ったが、他に適度な比較検討方法を見つけることができれば試してみたいと考えている。これらの背景を踏まえて、今後も同様の実践研究を重ねていき、色彩が及ぼす色の効果について考察を深めたい。

表 1. 参加者の属性：平均年齢歳

	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	合計	総合計
男性	0	0	0	2	5	3	0	10	32人
女性	2	4	1	2	9	4	0	22	

表 2. 計算ドリル回答数

	年代	性別	1回目 (問)	2回目 (問)	回答数差 (問)
1	20	女性	20	36	+6
2	20	女性	33	37	+4
3	30	女性	34	39	+5
4	30	女性	9	10	+1
5	30	女性	23	35	+13
6	30	女性	22	27	+4
7	40	女性	44	48	+4
8	50	男性	37	57	+20
9	50	男性	14	13	-1
10	50	女性	27	28	+1
11	50	女性	31	33	+1
12	60	男性	32	36	+4
13	60	男性	27	34	+7
14	60	男性	24	27	+3
15	60	男性	29	28	-1
16	60	男性	20	20	0
17	60	女性	21	25	+4
18	60	女性	28	38	+10
19	60	女性	23	24	+1
20	60	女性	10	11	+1
21	60	女性	30	36	+6
22	60	女性	30	30	0
23	60	女性	37	39	+2
24	60	女性	25	34	+9
25	60	女性	20	21	+1
26	70	男性	16	16	0
27	70	男性	8	12	+4
28	70	男性	22	25	+3
29	70	女性	20	26	+4

30	70	女性	22	32	+10
31	70	女性	33	32	-1
32	70	女性	27	33	+7

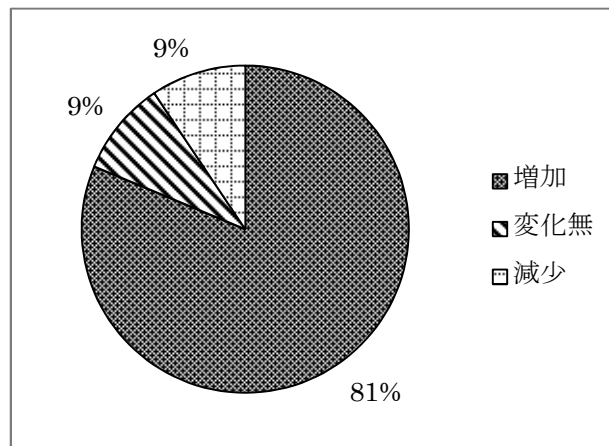


図4. 計算ドリル回答数増減のグラフ

表3. 前回の実践研究との比較

	参加者数	平均年齢	平均増加数	減少 (点数)	変化無
津別市	31人	59歳	5問	2名 (-1)	3名
名寄市	32人	51歳	5問	3名 (-1)	3名

3-3. アンケート調査結果

参加者に研修終了後にアンケートに記入を依頼し、その場で回収した。地域への愛着には居住年数が関係していることから⁵⁾、居住年数で各質問項目のグラフを作成した。

1) 居住地へ住み続けたいか

「これからも現在の居住地に住み続けたいですか?」の質問に対して、居住年数で差異が生じるのか集計を行った(図5)。居住年数1年未満は「住み続けたい」の回答が無く、居住年数1年以上になると、半数以上は「住み続けたい」「できれば住み続けたい」の回答であった。

居住年数が長い方が住み続けたい意識が高まる傾向が窺える。本アンケート結果では対象人数が少なく断定はできないが、居住年数と地域への愛着に関係性がある可能性があるといえる。

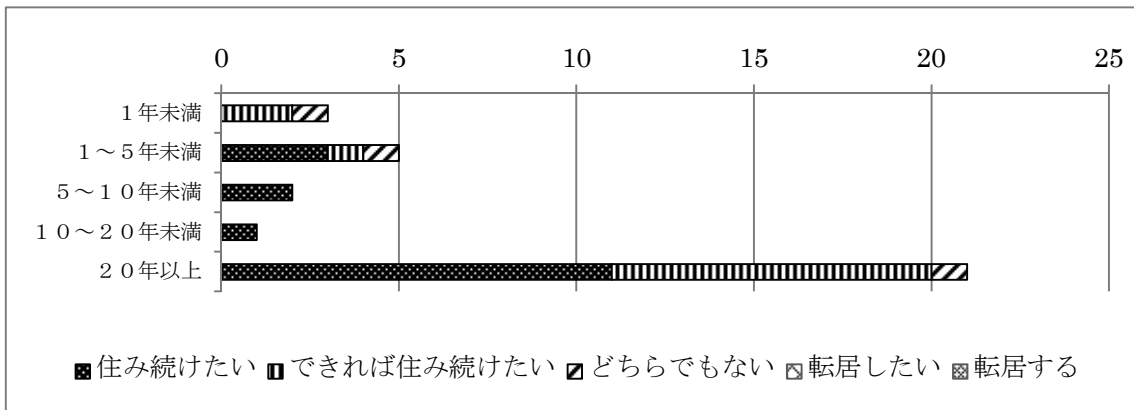


図5. 現在の居住地に住み続けたいですか？」集計グラフ

2) 地域の行事に参加しやすいか

「地域の行事に参加しやすいですか？」の質問に対して、居住年数で差異が生じるのか集計を行った（図6）。全体的に「はい」が優勢だったが、10～20年未満で「いいえ」の回答が1件あった。アンケートに理由は記入されていないため、どのような理由であるかは定かではない。今後は理由も確認できる項目を検討したい。

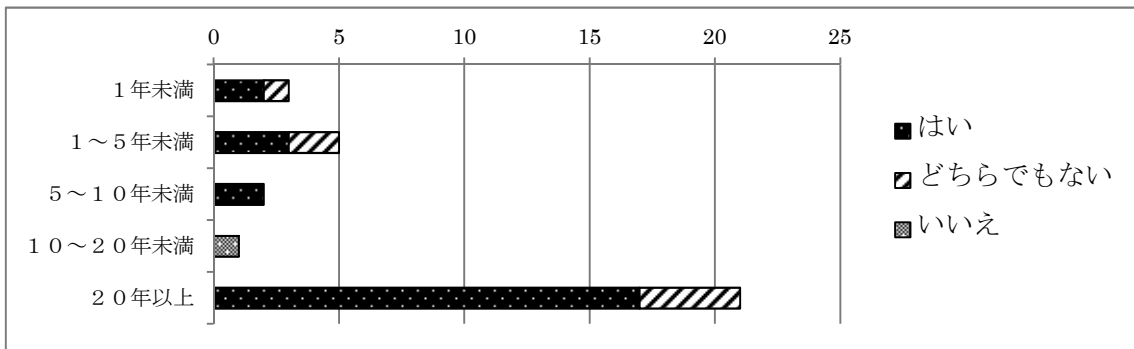


図6. 「地域の行事に参加しやすいですか？」集計グラフ

3) 情報発信は充分か

「情報発信は十分に届いていますか？」の質問に対して、居住年数で差異が生じるのか集計を行った（図7）。いずれの居住年数でも「どちらでもない」の回答が目立つ。20年以上の場合は、他の居住年数に比べて「はい」が優勢ではあることから既存のコミュニティや繋がりが効果的に働いていることが推測される。

だが、「どちらでもない」が2件、「いいえ」も1件見られたことから、情報発信が充実しているとは言えないだろう。

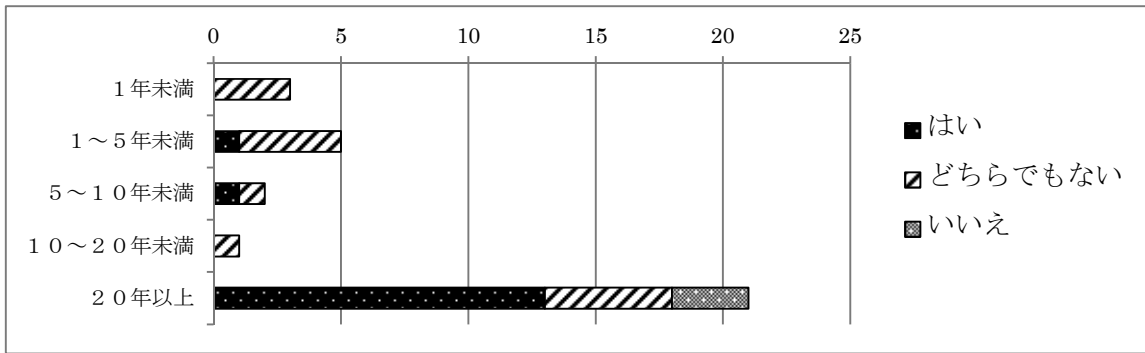


図7. 「情報発信は十分に届いていますか」 集計グラフ

4) 地域の交流、世代の交流は充分か

「地域の交流、世代の交流は充分ですか？」の質問に対して、居住年数で差異が生じるのか集計を行った（図8）。「はい」よりも「どちらでもない」が優勢で、「いいえ」も見られた。このことから居住年数に関わらず、現状では地域の交流や世代の交流に不足や不満を感じていることが窺えた。現状では地域の交流が充分ではないと感じている住民が多いが、住民自身が交流を望んでいるのか、次の質問を合わせて考察を行う。

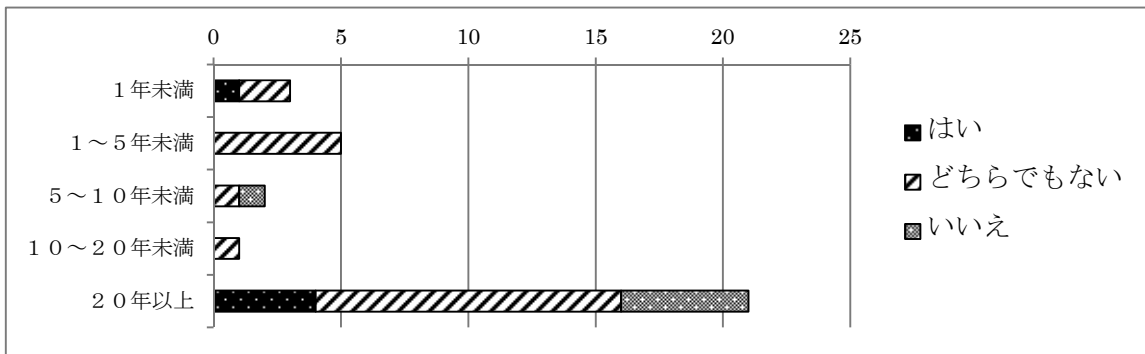


図8. 「地域の交流、世代の交流は充分ですか」 集計グラフ

5) 地域の交流は必要か

「地域の交流は必要だと思いますか？」の質問に対して、居住年数で差異が生じるのか集計を行った（図9）。「いいえ」が1件あったが、いずれも「はい」が優勢であり、このことから地域や居住年数、年代に関わらず、地域の交流は必要であると思っれていることが明らかになった。

前述した図8と図9から、世代の交流は必要だと感じているが、現況では世代の交流が出来ていないこと、交流に不足を感じていると読み取れる。今後は世代の交流を向上させることが必要であるだろう。

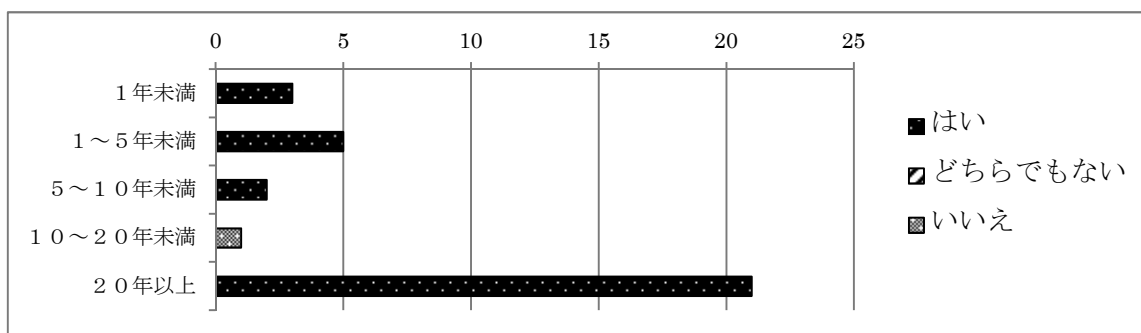


図9. 「地域の交流は必要だと思いますか」 集計グラフ

6) 研修に参加した感想

「今回の研修に参加した感想をお聞かせください」の質問に対して、複数回答可とした。居住年数や平均年齢に差異は見られなかったため、協力者数を100としてパーセントで表を作成した(表4)。「楽しかった」が100%、「また参加したい」が28%、知人にも伝えたいが19%であることから、色彩研修は気分を向上させ、研修会の参加継続に繋がると考えられる。体験学習はグループワークで行い、グループのメンバーは初対面同士であったが、アンケートの結果から初対面同士でも楽しく色彩を学び、コミュニケーション向上に繋げることができたと言えるだろう。知り合いが増えたが4%あることから、新たな交流が生まれていることも窺える。

表4. 今回の事業に参加した感想

楽しかった	知り合いが増えた	また参加したい	知人にも伝えたい	自分で企画したい
100%	4%	28%	19%	0%

7) 研修参加の感想について

「内容で面白かったこと、驚いたこと、学んだことについてご意見をお聞かせください」の質問に対して自由記入で回答を得たものを表5にまとめる。

「色の神経衰弱はトランプのときよりも難しく感じました。」「いつも頭を使っていないのを思い知りました。少しでもこれから頭の体操をしていきたいと思います。」「真剣になってしまいました。久しぶりに頭の体操をしました。まだ頭が燃えているようです。」「意外と難しかった。脳の活性化が図られた。」など、色合わせカードゲームによって記憶力や集中力などに影響を与えると感じた参加者が多く、体感していることが窺えた。これらの感想と前述した計算ドリルの結果を合わせると、色合わせカードゲームは参加者の気分や思考に影響を与えるものがあるといえるだろう。研修時の体験ワークでは終始、笑い声が絶えないことから、会場全体が明るく楽しい雰囲気に包まれていた。

体験ワークの内容も、安易すぎる、または、難易度が高すぎると参加体制に差が出てくる可能性があるため、さじ加減が必要となってくる。神経衰弱ゲーム自体は幅広く知られたゲームである。だが、色を覚えると作業は想像よりも頭を使うことから、丁度良い刺激

になっているのではないかと思われる。ある程度の付加がかかることや、ゲームへの闘争心も追い風になっているように思える。

また、これまでの筆者の経験を述べると、大学生ら若い世代は記憶力も良いことから、色の神経衰弱ゲームを10分程度で終えることができる。30～40代の中年層は20分程度、高齢者になると30分以上時間を要する。

記憶力を向上するために、色合わせカードゲームを何度も重ねることが認知機能向上に繋がるのではないかと予測している。確実なデータを取り、今後の研究課題に含めていきたいと考えている。

表5. 今回の事業に参加した感想の自由記入

- 色の神経衰弱はトランプのときよりも難しく感じました。
- いつも頭を使っていないのを思い知りました。少しでもこれから頭の体操をしていきたいと思えます。
- 真剣になってしまいました。久しぶりに頭の体操をしました。まだ頭が燃えているようです。
- 意外と難しかった。脳の活性化が図られた。
- 久しぶりに行いましたが、脳の動きが完全に失われておりました。
- カードゲームは何十年ぶりにしましたが、難しかったけど楽しかったです。
- 色が似ていて大変でしたが、脳の活性化になり面白かったです。
- 楽しかったです。
- 小さい子供でもトランプよりも楽しめるのではないかと思います。真剣に楽しませてもらいました！
- 色は年齢を問わず皆が知っているものなので、一緒に楽しめました。
- 普段はあまり使わない頭を久しぶりに動かせました！
- 神経衰弱が難しかったけれど、色んな色の由来が分かって良かったです
- トランプを使うだけよりも、色の方が集中力を使った。
- 小さい子供でも集中し、楽しく遊べると思った。
- 色の名がついた由来が分かって興味深かったです。
- 神経衰弱ゲームはトランプを利用した時よりも難しく感じました。
- トランプよりも色自体で覚えるのは難しかったです。
- 色の名前、由来に感動しました。和名は素晴らしいですね。
- 記憶力、集中力の無さに自分でビックリしました。最近、脳に刺激を与えていないと反省しています。
- 面白いゲームでした。
- 数字と違い覚えにくい。
- 記憶力は若い人には勝てません。でも楽しかったです。
- 数字と違って色はなかなか思えられませんでした。
- 楽しかった、色の表現にビックリです。

- 同様の事を何回も繰り返す動作に鈍くなってきているのがわかった。
- 記憶力の無さに驚きました。
- 日本人は色彩感覚が豊かです。
- 年齢と共に複雑な問題にうとくなつたと感じている。

4.地域差の検証

前稿の津別町と今回の名寄市を比較して、地域差が現れるのか考察を行った。アンケート調査日、属性、人口を表の通りである（表6）。

表6. アンケート調査対象の属性

	アンケート調査日	参加者	平均年齢	人口
名寄市	2016年1月30日	合計32名 (男性10名、女性22名)	51歳	28,614人
津別町	2015年3月31日	合計31名 (男性4名、女性27名)	59歳	5,113人

1) 地域の行事に参加しやすいですか

「地域の行事に参加しやすいですか？」の質問に対して、比較検討を行った（図10）。いずれも「はい」が優勢であり、おおむね参加しやすい状況ではあるものの、「どちらでもない」や「いいえ」の回答が名寄市のほうがやや多い結果となった。

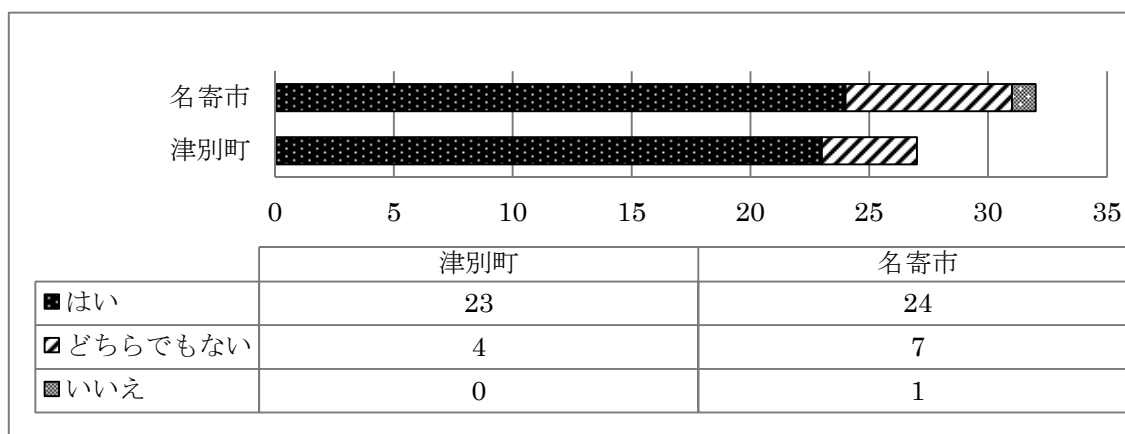


図10. 「地域の行事に参加しやすいですか？」比較グラフ

2) 地域の情報は充分に得られていますか

「地域の情報は充分に得られていますか？」の質問に対して、比較検討を行った（図11）。いずれも約半数が「はい」と回答している。地域行事には参加しやすいが、情報は充分とはいえないことが窺える。情報の受け取り方法については、残念ながら本アンケート

から読み取ることが出来ない。現状の情報発信は既存の地域コミュニティ、社会福祉協議会からのお便り、回覧板などがあり、SNSなどインターネットによる情報発信も存在するが、インターネットの情報を収取できるか否かは個人差がかなり出てくる可能性がある。今後アンケート実施時には情報収集の項目も設け、更なる考察を深めていきたい。

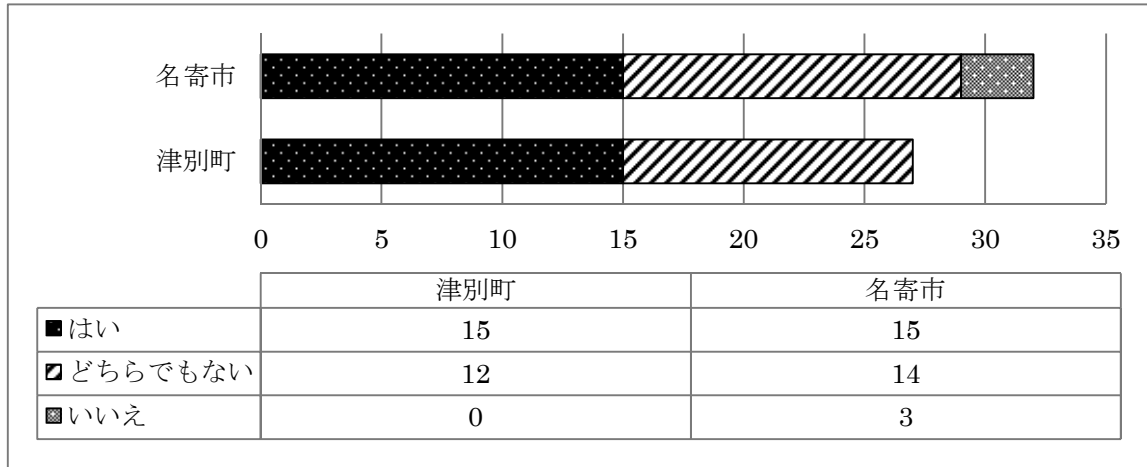


図 1 1. 「地域の情報は十分に得られていますか？」比較グラフ

3) 地域の交流・世代の交流は充分ですか？

「地域の交流・世代交流は充分ですか？」の質問に対して、比較検討を行った(図12)。約3分の2が「どちらでもない」または「いいえ」と回答している。十分な交流が行われていないことが窺える。津別町よりも名寄市のほうが、やや世代の交流不足を感じている。町と市では全体の人口に差があることから、名寄市の方が世代交流の不足を感じているのではないかと推測される。

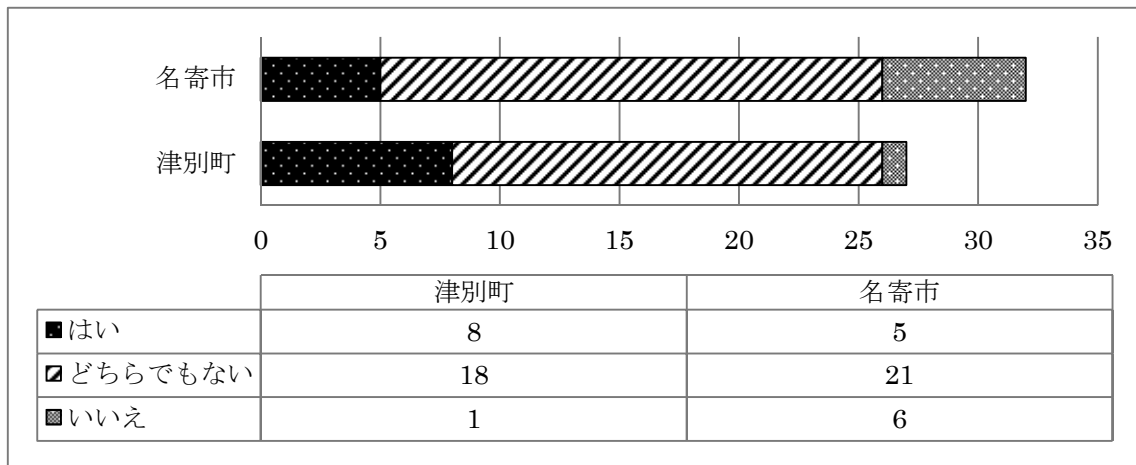


図 1 2. 「地域の交流・世代交流は充分ですか？」比較グラフ

4) 地域の交流は必要だと思いますか？

「地域の交流は必要だと思いますか？」の質問に対して、比較検討を行った（図13）。ほぼ全員が「はい」と回答している。いずれも現況では地域の交流が実施されていないが、多くの住民が交流を望んでいることが明らかになった。このことは情報発信も含めて今後の課題であるといえるだろう。

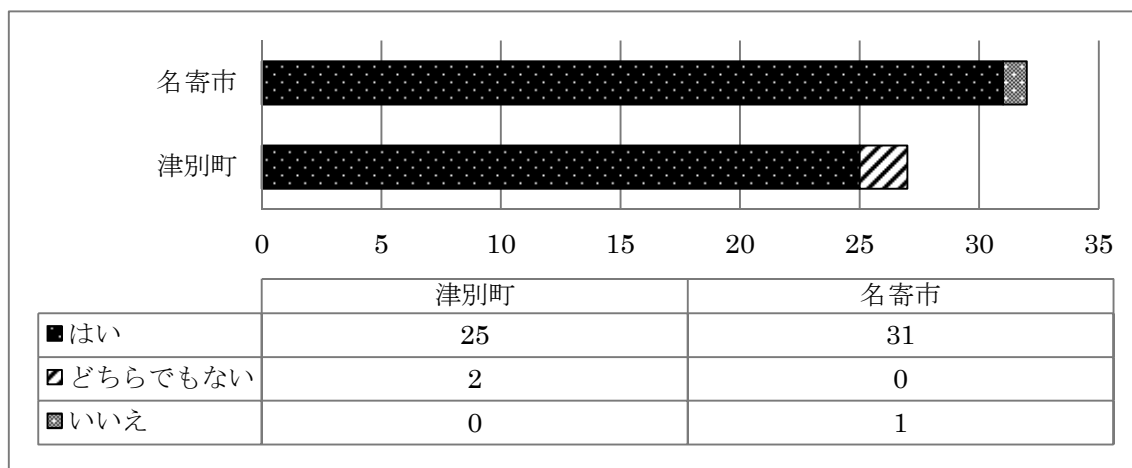


図13. 「地域の交流は必要だと思いますか？」比較グラフ

5. 考察

本研究では「色彩」をテーマにした研修の実践研究を行った。研修では色彩のカードゲーム「スマイル色サプリ®」を使用した体験ワーク「色合わせカードゲーム」を行い、色彩の効果や特性を検証した。体験ワーク前後に実施した計算ドリルでは、後半の回答数向上が見られた。アンケート調査でも、記憶力や集中力、コミュニケーションの向上を体感する参加者が多く確認できた。これは現状で地域活動を支える高齢者の健康寿命を延ばす点で、色彩研修は効果的であることが窺える。特に計算力の向上や脳の活性化を体感している参加者も多いことから、認知症予防という面でも効果が期待できそうである。

また、前稿の対象地域である津別町と本稿の対象地域である名寄市の2つの比較検討を行った。大きな地域差は見られなかったが、津別町よりも名寄市のほうがやや地域交流に不足を感じていることが窺えた。いずれも現況の地域の情報収集や地域交流には十分ではないと感じていることがわかった。さらに地域交流を求めていることも明らかになり、地域交流を取り巻く現況と交流不足という課題を見つけることができた。

交流不足に対して、色彩を活用した研修は地域活性化に役立てることが可能であることが窺える。自由記入のコメントを見ても、「色は年齢を問わず皆が知っているものなので、一緒に楽しめました。」、「小さい子供でも集中し、楽しく遊べると思った。」など、世代を超えた交流が不足している現状課題にアプローチできることができると考えられる。色彩は老若男女に受け入れられる特性を改めて確認することができた。

このような背景も踏まえて、多様なライフステージの女性を地域活動の新たな人材発掘とした場合、子育て中の母親をターゲットとするのが効果的ではないかと考えられる。子

どもと一緒に参加できる研修内容であり、高齢者と母親世代、子どもといった幅広い世代の交流を行うことができる利点もある。アンケート調査から見えてきた世代の交流不足を解決する手がかりになるのではないだろうか。

今後も高齢者や女性、幅広い世代に応用が利き、かつ、手軽に取り入れられる「色彩」をテーマに、質問項目の設定やヒアリング調査も重ねて、更なる現況と課題、解決策を考察していきたい。今回の研究結果をもとに色彩研修の内容を更に向上させ、学習意欲の意義や人材育成へ応用し、地域活性化に貢献し広めていきたい。

6. おわりに

前稿に引き続き、色彩の活用価値と可能性を感じることができた。今後も更なる研究事例をまとめて、より具体的な活用方法を提案し実践していきたい。

7. 謝辞

本研究にご協力して下さった名寄市社会福祉協議会様、ご参加くださった皆様に感謝申し上げます。

注

- 1 「北海道は2015年国勢調査（速報）の結果をまとめた。道内人口は538万3579人で10年の前回調査（確報）より2.2%減った。下落幅は前回と同じで過去最大。ピーク時（1995年、569万2321人）に比べ約30万人減り、旭川市に匹敵する人口規模が消えた。道内179市町村の9割超の171市町村で減少。一方で札幌市は2.1%増の195万3784人と、一極集中が一段と進んでいる。」日本経済新聞引用、2015.2.17掲載。
<http://www.nikkei.com/article/DGXLZO97342900W6A210C1L41000/>
- 2 北海道総合政策部総務課「総合政策部 平成27年度施策概要」
<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/sum/sum/27gaiyou.htm> 2016年2.26確認。
- 3 北海道総合政策部「2025年北海道のすがた」
<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/ssa/academy/12academy/2025year/mokuji.htm> 2016.2.1確認。
- 4 外崎由香「色彩研修がもたらす地域活性化の可能性：地域活性化ツールとしての色彩研修の実戦研究」藤女子大学紀要,(22),2015.3,pp31-44.
- 5 鈴木春菜、藤井聡「地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究」土木計画学研究・論文集, 25(2), 2008, pp357-362.